

■『環海異聞』とは

さて、これまでに度々でてきた『環海異聞』の「環海」には四方を海に囲まれる、あるいは海に囲まれた国という意味がありますが、本書全体としては海を巡ったという意味が強く、私は意識的な見地から「世界を一周した人の見聞記」であると思っています。

冒頭で述べたように、本書は文化元（1804）年にロシア使節レザノフに伴われて帰国した津太夫たち4名の体験を綴っています。彼らは11年前の寛政五（1793）年の冬に石巻から江戸へ向けて出港した若宮丸の乗組員でした。この船には船頭以下16人が乗り組んでいましたが、暴風雨に遭遇して北へ流され、アリューウシャン列島の「オンデレイツケ」（アンドレイノフスキー諸島）という島に漂着しました。その後、彼らは生死の境を彷徨いながらロシア各地を転々と巡り、首都サンクトペテルブルクから海路で帰朝します。この時、大槻が仙台藩の藩校「養賢堂」で指導者的な役割を果たしていた儒学者の志村弘強と共に4人から顛末を聞き、その成果をもとにして文化四（1807）年に全15巻で成稿したのです。ちなみに、この書物はその後も写本で流布し、本学図書館の所蔵本は全15巻を10巻に合本したものになっています。

本文巻一と巻二には漂着より「ナーツカ」を経て「ヤコーツカ」までの記述、巻三は「ヤコーツカ」より「イルコーツカ」までの移動の記述、巻四では服飾・住居など、巻五には宗教・婚姻など、巻六は葬祭・行政・法制・軍事・銭貨など、巻七には度量衡・農業・商業・医療・産物などが、巻八は言語・地理・天文・道徳などが記されています。巻九は「イルコーツカ」より「ペトルブルカ」までの移動の記述で、巻十、巻十一は国王に謁見した件や首都「ペトルブルカ」滞在中のことなどに及びます。さらに、巻十二以降

はレザノフ使節に伴われ帰国するまでの記録になっています。特に本書の特徴として、大槻の門人で絵心のある人物⁽⁵⁾が漂流民の記憶に基づいて描いたとされる100を越える絵図を収め、異文化への理解を容易にしています。

なお、この漂流民たちの帰朝については、石巻からアリューシャン、シベリアを経てバルト海を西進し、大西洋を横断、ブラジルを経て南アメリカ最南端へ達し、ホーン岬から太平洋へ入って日本へ戻った経緯から、結果的に世界一周を成し遂げた初めての日本人であるといわれます。

■鎖国体制の中の海外情報として

現在、本学図書館ではこの『環海異聞』を寛政六（1794）年に桂川甫周^{かつらがわ ほうしゅう}が編纂した大黒屋光太夫たちの漂流記録『北槎聞略』^{ほくさぶんりやく}などと共に、「対外交渉史料コレクション」のロシア部門に置いています。そして、これらは漂流記や見聞記としての観点から、或いは成稿当時の海外情報として利用されてきているのです。

このような中で、本書の成立経緯として心得ておきたいことは、同書が漂流民から聞いた話、所謂「聞書き」と呼ばれる口述記録を、蘭学と儒学の学者が体系付けて編纂したものであるということです。従って、その過程で編纂者の判断が働き、津太夫たち漂流民が体験した臨場感や緊張感が変化した箇所もあるのではないかと、このことを念頭においておきたいものです。

それでも本書『環海異聞』は、その成立時期にレザノフの命令によってロシア兵士が我が国の北方住民へ断続的な襲撃を加えていた「文化魯寇（フヴォストフ事件）」や、この事件の直後に日本の捕虜となったロシア艦の艦長とロシアに捕縛された商人高田屋嘉兵衛^{たかだや かのへい}との人質交換で決着した「ゴロヴニン事件」、さらには使節